

第三 殖産興業

秋元氏三代ノ郡内ニ臨ムヤ啻ニ治水ノ道ニ力ヲ竭サレタル而已ナラス桑麻ヲ植エ機業ヲ興シ殖産興業ノ上ニモ大ニ力ヲ傾注セラレタルコト之ヲ舊記ニ照シテ歴々其ノ蹟ヲ認ムヘキナリ

古語菽麥

上州絹ヲ郡内ニ御移シ被遊候テヨリ織出シ絹ヲ調ニ郡内ニ他所ヨリ參リ候切手ニテ居リハ^{原本ノ}猿橋初通リ候事也高山五兵衛其ノ比ノ大身五百石ニテ絹師十二人有之候其次ハ某高祖父四百五十石ニテ絹師八人差置候御上初ハ千両ニテ桑モ三百両ノ運上ナリ後々ハ義舟公御代ニ絹運上二千両桑ノ運上千両ニ罷成ル云々

舊家断絶記

柳田彦左衛門

一 總社御譜代總社ニテ柳田源八郎ト云百姓有此者地方割合ニ達シ總社御領^領拜ノ節モ百姓トモノ高盛付ヲ極メ古キ盛付帳面彼方名前悉ク有之百姓共是ヲ芋頭ト云是ハ芋ニ限り受納致候處ノ潔白ノ者也寛永十年郡内へ御供仕郡内ニ於テハ地面ノ割ヲ相止メ桑ヲ植候儀相勤メ候ハ此者工夫也云々

大友理左衛門

一 此者上總以來ノ御家人也深谷へ御供仕候者ハ笹笠大友青木長山四家相残ル内也深谷ヨリ總社ニ移リ其後郡内へ御供仕ル處郡内ニ於テ絹運上桑運上等未不始内絹師ノ方ヨリ冥加金トシテ金子ヲ相納メ一疋

ニ付五匁宛也其受取役也云々

万覺帳

寛文五年八月晦日

一 今日瓦焼五郎兵衛ト申モノ谷村へ瓦焼カセニ遣シ手間賃ノ儀ハ一日ニ^マ宛ニテ御座候様子次第二三十日モ罷在瓦焼キ見可申由申候五月十日ナト在之候テハ手間賃ハ取り申間敷由五郎兵衛旦那五兵衛申ニ付其ノ段モ申遣之

寛文五年九月廿三日

一 瓦焼候土川^土たの深田ニ有之候者^勢小土能可有之候此方ニテ瓦土取寄見申候ニ其元之者^勢小土之コトク黒ク在之候間大形能可有之ト存候事

万覺帳

貞享五年四月五日

献上生絹島御上下覺

一 島絹 三疋

此絹六月十日ニ出來參候内一疋尋墨有之候故織直シ候様ニト六月四日ニ被仰遣候同廿八日出來參着

右之通五卷但巻卷ノ丈クヅラニテ五丈五尺幅カネニテ一尺三寸五分耳糸上糸ニテ此一巻ヲ一ツニ切以

上十卷ニテ御上被成候一卷二丈七尺五寸宛但クジラサシニテ
一 機道具新規ニ仕常ハ御勘定所ニ差置織候節相渡シ服忌其外穢敷無之上々吟味仕織ラセ可申由申遣候酒
井權左衛門承リ當月三日ニ被仰遣候

全年辰ノ卯月

献上ノ生絹島織主之覺

一 二疋 星野宇右衛門
一 一疋 市川仁右衛門
一 一疋 中町仁右衛門
一 一疋 下町 太兵衛
右五卷クジラニテ五丈五尺ツ、

辰七月朔日

一 絹平七月朔日御献上委細ハ四月ノ所ニ書付申候

谷村ニテ被仰付候御矢根千本ノ入目

一 金三兩一分七百五文
但一兩ニ六貫五百目ノ直
一 錢八百三十八文

鉄^方割二貫四百五十目
但一兩ニ付十四貫目ノ直

一 金壹兩壹分壹貫文

鍛治炭七十俵
但一俵百文ツ、

一 金八兩二分四百四拾八文

鍛治四百十二人半ノ作料
但一工ニ付百文ツ、

一 金二兩二分百二十一文

右四百十二人半ノ扶持方

但一日ニ中田米六合ツ、但二十八俵之直

一 工數四百四十五人御手前鍛治是ハ作料御扶持方渡シ不申候

合金十六兩七百十六文

工數八百五十七人半内四百四十五人ハ御手鍛治

右辰六月廿七日之日付ニテ申來ル

已献上之生絹島谷村へ申遣候出來參候御本

一 島 絹 上町 傳右衛門
一 同 中町 七兵衛
一 同 上町 久三郎
一 同 上町 市郎兵衛

長幅先年之通脇差其外穢敷儀無之様ニ織セ可申由機者御勘定所ニ有之ヲ渡シ織セ可申旨申越候

一 同 上町 市郎兵衛

來午ノ年者絹平コハク織ラセ候様ニ被仰出候

合五端右之御本五月十八日ニ申遣候右之通六月十二日ニ出來參候織主書付置候

注1 高山五兵衛 秋元家筆頭家老

2 絹師 絹織人

3 某高祖父とあり四百五十石とあるので『治績考』筆者を知る手がかりとなるが、『家臣録』などで調べても該当者不明。高山三家のうちか林家と思われる。

4 川田の深田 下谷村の枝村に深田あるも「川田」とあるので疑問。「深田」での瓦焼きの伝承なし。

補注 本項については谷村工業高等学校社会部刊の『郡内機業発達史(上)』の「第二節 史料から見た郡内機業の起源」に詳しい解説論文がある。